

---

ユナイテッド・ワールド・カレッジISAKジャパン  
「教育セクターにおける  
アントレプレナー支援プログラム」

# 背景とプログラムの狙い

## 背景

「ボトムアップの教育改革」の必要性：  
トップダウンで決められたコンテンツを一斉に追いかけるのではなく、現場のリアルかつ多様なニーズに根ざした変化の実現を支援できないか？

そのような変化の実現を支援するものとして、「教員研修」モデルとは異なるプログラムとコミュニティがあるとよいのでは？

- 「研修」のフォーマットではなく、「変化の起こし方を教える」のでもなく、実際に変化を起こすこと自体を支援するプログラム
- 年次での輪切りモデルで大量に一斉研修するのではなく、「教員だけ」ということでもなく、「多様かつ少数精鋭の参加者」で成立したコミュニティでの学びの追求

ISAK設立の経験から得た学びやネットワークを教育コミュニティの発展のためにいかに還元できるか？

## プログラムの狙い

- 教育セクターにおいて、現場のニーズに基づいて新たなサービスやプログラムを提供しようとする「アントレプレナー」に対し、プロジェクト実現に向けたアクセラレーター的支援を提供し、システム・レベルの変革を実現することができるよう支援する。結果として、子どもの多様な可能性を育む多様な教育機会の選択肢が生まれ、それらがより多くの子どもにとってアクセス可能になる社会の実現をめざす。
- 所属・経験年数・専門分野が異なる多様なバックグラウンドをもち、かつ卓越したリーダーシップ・ポテンシャルを有する少数精鋭のフェローでコミュニティを構成し、各々がもっている固定観念を解き放つと同時に、それぞれの強みを活かして合ってコラボレーションがうまれるコミュニティとする。プログラムの規模は、多様なコミュニティの形成と、ハンズオンな支援の両立が可能な規模を維持する。
- 座学中心の研修モデルではなく、個々のフェローが「実現したい教育の未来」をプロジェクトとして立ち上げ、試行錯誤を通じてリーダーシップやスキルを形成し、かつコミュニティとしての共同ラーニングを重視するプログラムとする。
- 5年後の展望として、プロジェクト実施を通じてみえてきた政策ニーズなどをふまえ、ボトムアップの政策提言を行うコミュニティとなることをめざす。同時に、海外での事業展開、重点的に支援する領域、機能拡充などについても検討する。

# 実証成果：概要

## 達成したい状態

---

- A. 来年度の本格始動に向けて高いアスピレーションとポテンシャルを有する、多様なバックグラウンドの参加者が選定されていること
- B. 参加者がプロジェクトを通じて解決しようとしている課題・ニーズが明確に定義され、次のステップがクリアになっていること
- C. 参加者が自らのビジョンや成果として達成したいインパクトについてのストーリーを伝えられるようになること
- D. 海外を含む大学のイノベーション教育プログラムなどの組み立て事例やについての調査をふまえ、プロジェクト・モジュールのプロトタイプができていていること

## 実際の達成度

---

- A については達成できた。
- B, C についてはワークショップや個別支援を通じて一通りは達成することができたが、個別のニーズや状況にあわせ、カスタマイズしていきたい。
- D についても進行形であるが概ね形になっており、実際の支援を通じて必要なプログラムのコンテンツがより具体的に見えてきているため、プログラムの長期ビジョンと共に引き続き検討を進める。

## 理由・改善/発展の方向性

---

- Aについては、参加者コミュニティの質の高さについて参加者自身からもよいフィードバックがあり、既にコラボレーションも生まれている。今回は参加者の男女比が5:1となったが、今後は半々となるよう、女性の参加者候補にリーチする方法やパイプラインを開拓していく方法を検討したい。
- B, C, Dについては、「今後のプログラムの方向性」の頁に詳述

## 実施内容：プログラム参加者

● 自治体 教育委員会管理職（校長経験者）	男性	40-50代
● 学校教員・管理職 - 公立	男性	
● 学校教員・管理職 - 私立	男性	30代
● 大学内に設置された教育プログラム （児童・生徒向け）運営者	女性	
● 教育関連ベンチャー企業 代表取締役CEO	男性	
● NPO法人 代表理事	男性	20代

※上記に加え、各メンバーの派遣元におけるチームメンバーも研修や個別支援のミーティングなどに参加

# 実施内容：プログラム設計（全体像）

本プログラムは、2019年4月に正式開講を予定しており、本事業期間中は助走期間という位置づけのもと、主に以下の活動を行った。

## ① 参加者に対する集合研修（2月4日）

ストーリーテリングとビジョンのワークショップ、メンターへの事業相談を中心とした研修を行った。

## ② 外部研修コンテンツのコミュニティ全体への共有

全員の合う日程での集合研修が1日のみとなったため、当初集合研修で行うことを予定していた内容を学べる外部研修を活用したり、その研修に参加したスタッフやフェロー（参加者）がコミュニティ全体に共有したりすることでカバーした。

## ③ 個別の参加者への支援

個々の参加者に対する支援を各プロジェクト平均10時間程度（準備時間を除く）行った。内容としては、プロジェクトのスコープ策定やワークプラン策定のサポートなどをプロジェクトの課題やニーズの分析を行った上で、必要なメンターや専門家を紹介し、視座を拡大した上で実行の伴走のためのプランを確認した。

## ④ プログラム設計

海外のイノベーション教育プログラムの事例や教育サービス立ち上げの事例などをふまえ、プログラムの今後の展開プランを策定した。

# 実施内容：①集合研修&②外部研修活用

プログラム	目的	実施内容	実施日
集合研修	<p>参加者ごとにプロジェクトが異なるステージにあるところ、すべての参加者が以下の状態に到達することを支援する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• 自らがプロジェクトに取り組む理由について説得力とauthenticityを持つストーリーが伝えられるようになっている。</li><li>• 2ビジョン・ステートメント（ができていて、フィードバックも得られている。</li><li>• 相互支援しあうコミュニティとしての繋がりができている。</li></ul>	<p>「誰にどのような価値を提供するか」という価値定義（WHY）が明確にならないまま、ソリューション・仕様（HOW）が目的化する傾向がみられるため、「WHY」の明確化に力点をおいた研修を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• ISAK立ち上げを追体験しつつ、ビジョンとストーリーテリングの果たす役割について知るためのセッション</li><li>• Public Narrativeのワークショップ</li><li>• ビジョンのワークショップ（ある参加者の派遣元で別途行った手法との比較検証含む）</li><li>• 専門家・メンターとの個別セッション</li></ul>	2/4
外部研修からのラーニング共有	<p>集合研修ならびにオンラインコミュニティにおいて、学んだことをフェロー同士で共有し、お互いのプランにフィードバックをし合う</p>	<p>社会起業家向けワークショップ （起業家の足跡を追体験するフォーマット）</p> <hr/> <p>社会インパクト評価ワークショップ</p>	<p>1/22, 23 2/13</p> <hr/> <p>12/3,4 2/21, 22</p>

## 実施内容：③個別支援（基本モデル）

### プロジェクトの組成または 方向性確認

これからプロジェクトが立ち上がる段階、まだソフトな段階にある場合は、「誰に」「どのような価値を」「どのような手段で」届けるかについてのアスピレーションを整理する

初期段階からチームと話した上で支援のフォーカスの合意

### 視座の拡大とリフレーミング

独自のネットワークを活用し、視座を拡大してくれるようなエキスパートを初期段階から紹介

「紹介して終わり」ではなく、共にエキスパートから視点を引き出し、そこから得られたラーニングをもとに、プロジェクトのスコープや鍵となる仕組みなどについて再度フレーミングする。

### 実行の伴走

フェローのニーズやプロジェクトの進捗によって必要な支援を提供

- 事業計画
- ガバナンス
- マーケティング
- 資金調達

加えてリーダーシップ開発やコーチングなどのソフト面での支援も行う。

※ 個別支援の詳細は成果報告書の詳細版に記載

## ④今後のプログラムの方向性：基本モデル

### 事業期間中のラーニング

---

年間6-10名は日本において「システムレベルのインパクトを出しうる教育アントレプレナー」の規模感を考えると、スタートとしては適正なサイズ。むしろ、継続してこのサイズを維持すること自体もチャレンジングであり、サーチ範囲拡大とパイプラインを育てる工夫が必要（特に女性の候補について）。

### 今後の課題・展望

---

事業インパクトが出せるモデルが確立できるまでは6-10名程度の規模を維持。その後、「フェローが事業を成功させた後にメンターになる」という循環モデルを確立し、5年程度で15-20人規模、7-8年で30人規模まで拡大することをめざすが、その程度のサイズを維持する。

事業のミッションに合った注力領域を定めることや、ファンディング機能を自分たちで持つかどうかについては今後要検討。外部の教育アントレプレナー向けのファンディング市場がどの程度発展するかにも依存する。

## ④今後のプログラムの方向性：フェローの募集・選考

### 事業期間中のラーニング

---

- 多様なバックグラウンドをもつ少数精鋭の参加者を「混ぜる」ことによるインパクトは大
  - 特に公教育システムの内側にいる参加者にとっては、固定観念を打ち破る効果が大きい。
  - 卓越したポテンシャルをもつ人材のみ厳選したため、コラボレーションが発展しやすかった。
- 他のイノベーション・プログラムでは、アントレプレナー本人だけではなく、チームごと選考・支援対象にしているケースもみられるため、いくつかのケースではチームへの支援も試みたが、非常に効果的であると感じた。

### 今後の課題・展望

---

- 今後、公募を始める準備段階として、単に認知度を高めるだけでなく、フェローの質やプロジェクトの実績を通じ、インパクトの出るプログラムとしての認知を上げていく必要がある。
- 2期のフェロー候補として、チームとして認定するケースも検討する。

## ④今後のプログラムの方向性：支援の内容

### 事業期間中のラーニング

---

- フェローのニーズやプロジェクトの進捗度合いが一律ではないため、当プログラムの場合は、個別の支援が中心となる方向性で合っていると確信を得た。
- 一斉型研修にする場合、ノウハウ・方法論というよりは、成功したアントレプレナーの軌跡を追体験するようなワークショップのほうがあとに残る学びが大きい。
- プロジェクトの組成段階において、How（方法論、解決策）が目的化し、アウトカム定義がはっきりしない問題は教育イノベーションに限らずみられる問題であり、海外大学などのイノベーション・プログラムにおいては、この問題に対応するための構造化されたアプローチも存在する。
- エキスパートの紹介が個別支援の中心になることが多かったが、プロジェクトの提供価値などを整理した後、早めの段階でエキスパートを紹介することで、当初想定していなかったがニーズに合致する人を紹介できたこと、紹介しっぱなしではなく共にディスカッションに入ることによって視野の拡大やプロジェクトの提供価値のリフレーミングを一緒に行えたことなどの面で、フェローには総じて好評を得た。

### 今後の課題・展望

---

- 個別支援＋年間4-5回のアントレプレナーから直接学ぶモデルのワークショップを行うモデルを基本型とすることを決め、スピーカーとなる海外のアントレプレナーとは既にコンタクトを取り始めている。
- プロジェクトの組成段階において、How（方法論、解決策）が目的化し、アウトカム定義がはっきりしない問題について、海外大学でのイノベーション・プログラムで用いられている方法を個別支援においては試し始めており、2期以降はこれをアレンジ・テンプレート化して支援や研修で活用したい。

# プログラム設計上のポイントと各点についての参加者コメント

## 多様なバックグラウンドをもつ少数精鋭の参加者コミュニティ（参加者自身が最重要なコンテンツ）

- 今回のコミュニティがなければ出会うことがなかった人と事業でコラボレーションしようという話がすでに始まっている。
- 集まっている人たちがすごい。学校現場では考えられないような子どもに対する教育観や教師観にふれることができ、その様々な視点がものすごく刺激になった。

## 独自のネットワークを活かした事業支援

- （同種のリーダーシップ・プログラムや支援プラットフォームと異なる魅力として）国内外の識者へのコンタクトをアレンジしてもらうことができる。
- （メンターや他の参加者とのやり取りを通じて）やりたいことの方角性が具体的にになってきた。
- ステイクホルダーの巻き込み方について具体的なアドバイスをもらうことができた。

## 自己変革からはじまる社会変革（“How”だけではなく“Why”の明確化のサポート）

- （走り続けてきて自分の内側のリソースを充填する時期にちょうどきていた中で）長期の展望と広い視野で相談できる方になかなかお目にかかる機会がない中、皆さんのネットワークに繋げていただけたことで自分自身をエンパワメントしていきながら、使命をもって成し遂げたいことを実現させていきたい。
- これまでになかった価値観に触れ、自分のミッションの曖昧さを実感したが、その実感こそが自分のビジョンを深める原動力になるものであり、今後実際にプロジェクトを進めていく上で大切になると感じた。
- 考え、表現することで、より（自らのビジョンが）深まるプログラムであり、大変有意義だった。